医療系大学生の被災地での臨床心理学的地域援助体験

藤澤　美穂[1)]，氏家真梨子[2)]，畠山　秀樹[2)]

（受理　2015年10月５日）

Experience of clinical psychological community support in a stricken area after Great East Earthquake and Tsunami by medical university students.

Miho Fujisawa, Mariko UJIIE and Hideki Hatakeyama

キーワード：医療系大学生，臨床心理学的地域援助，東日本大震災津波

Keywords : medical university students, clinical psychological community support, Great East Japan Earthquake and Tsunami.

Ⅰ．はじめに

東日本大震災津波から４年半が経過した．岩手県においては，仮設住宅に住む方は２万人以上（岩手県復興局生活再建課，平成27年８月31日現在），災害公営住宅の工事完成進捗率は３割程度（岩手県県土整備部建築住宅課，平成27年８月31日現在）に留まっている．仮設住宅から災害公営住宅等の住まいに移る方にとっては，新しい環境への適応や新たな対人関係構築への不安がつのっている．また仮設住宅に留まる方には，焦りや無力感，取り残され感が感じられると同時に，少ない人数となった仮設住宅コミュニティの再構築という課題に直面している．

被災という体験は，その出来事自体の衝撃のみならず，その後の生活にも長く重く影響を及ぼす．被災された方とそのコミュニティへの継続的な支援が，強く求められている．

東日本大震災津波を経験した岩手県で医療保健福祉に従事するということは，こういった困難を経験された被災者にかかわることを意味する．今回，医療系総合大学としての本学に学ぶ学生が沿岸被災地に出向き，被災者との交流をもつ機会を得た．これは，筆者らが実践する臨床心理学的地域援助を体験することともなった．本稿においては，学生が関与した活動を概観し，この体験が学生にどのように感じられたのかを検討し，そして正課外活動におけるアクティブ・ラーニングの意義を考察する．

１）岩手医科大学 教養教育センター 人間科学科心理学･行動科学分野
２）岩手医科大学 健康管理センター

Ⅱ．学生との準備と実践の協働

1．今回参加した臨床心理学的地域援助実践とは

臨床心理学的かかわりについては，臨床心理査定（心理検査等を用いたアセスメント）や臨床心理面接（カウンセリングや心理療法）が一般的には広く知られ，またクライエントと臨床心理士との１対１関係が想定されることが多い．これらに加え，臨床心理士の専門領域には「臨床心理学的地域援助」がある．臨床心理学的地域援助とは，個人への援助のみならず，その個人を取り巻く家族，集団，組織や社会システムを対象とした，システマティックかつマネジメント的な方法による援助であり，ファシリテーションやコンサルテーションをおこなうことも含まれる（山本，2001）．

災害時のこころのケアにおいて臨床心理士が関わる支援内容を臨床心理士の専門業務に照らしてみると，①臨床心理査定：対象者の心理状態の的確なアセスメント，②臨床心理面接：トラウマ体験によるストレス反応や喪失に伴う悲嘆反応に対する面接（心理療法）による適切な臨床心理学的介入，③臨床心理学的地域援助：被災したコミュニティへの臨床心理的関わりとして整理できる（藤澤（川口）・山口，2012）．

今回学生が関与した支援活動は，岩手県臨床心理士会により2011年より継続されている，宮古市田老の仮設住宅地域における支援活動である（活動の詳細は藤澤（川口）・山口，2012，藤澤，2013，岩手県臨床心理士会，2015を参照されたい）．活動のねらいは，臨床心理学の立場から，被災者が主体的に人生を送ることができるような支援をすることであり，①被災と避難生活によるストレスの影響を軽くして，心身が楽になる支援，②生きることへの肯定感と，自己コントロール感を回復して，自己決定していける支援，③支援者とのつながりを感じ，コミュニティの形成を促すことで，孤独感を減らす支援　の体現を目指し実践を継続しているものである．具体的には，サロン活動，リラクセーションプログラム，そして季節に応じたイベントを，月２回程度，仮設住宅集会所へのアウトリーチによりおこなっている．

2．田老ふれあいライブ企画

東日本大震災津波から３年半が経過した2014年中旬，岩手県臨床心理士会会員のもとへ，花巻市内のベーカリー店「パン屋√s」から，震災チャリティ販売の売り上げを用いたイベント開催の提案がなされた．その後関係者による話し合いを経て，岩手県臨床心理士会が支援活動を継続している宮古市田老地区において，音楽イベント「田老ふれあいライブ」（以下イベントと記載）を開催することが決定された．イベントは田老ふれあいライブ実行委員会の主導のもと，岩手県臨床心理士会の宮古支援チームが共催でおこなうこととなった．イベント内容は，花巻市に拠点がある「ブドリ舎Band」によるジャズの演奏を中心に，ベーカリーによる自家製酵母パンの提供，岩手県臨床心理士会員が焙煎した珈琲豆によるコーヒーの提供とアイスクリーム等の提供等とした．この検討経過の中で，学生のイベント参加について検討され，第一筆者が部長を務める２団体にイベント参加を促したところ，２団体ともに参加希望を表明した．

3．イベント当日までの準備

今回イベントに参加することとなった２団体の一つは「吹奏楽サークル」である．当団体は薬学部３年Ａさんが１年生のときに立ち上げたサークルで，薬学部の学生が主だが，医・歯学部の学生も所属している．当団体の被災地での演奏活動については，2015年４月には住友商事東日本再生ユース・チャレンジ・プログラム－活動・助成研究－2015年度の助成を得ている．また2015年５月12日，学生部長会議で学友会の公認団体として認められた．

もう１団体は「からあげ同好会」である．歯学部２年Ｂさんが１年生のときに立ち上げたサークルで，現時点では大学非公認団体である．自分たちが好きなからあげの追求を通し，年を取っても身体に負担なく好きなものを食べ続けることができるような方法を模索し，食を通じたQOLの向上を考える活動をおこなっている．

イベント当日まで，吹奏楽サークル部員は演奏曲目を決定し，演奏曲の練習をおこなった．またからあげ同好会部員はからあげ調理の準備をおこなうとともに，衛生面への配慮の徹底に心がけた．

2015年５月11日には，吹奏楽サークル・からあげ同好会の両代表と第一筆者にて田老ふれあいライブ実行委員会会議へ出席し，イベント内容の詳細を話しあった．また学生は被災地活動に関するボランティア保険に加入し，活動の安全をはかった．

同年５月27日放課後には，今回のイベント内容の説明と被災地での活動にあたっての事前レクチャー及び打ち合わせ会をもった．この会では，第一筆者より臨床心理学的地域援助に関する説明，トラウマティックストレスに関する心理教育，および被災地での支援活動にあたっての諸注意や留意事項を説明し，メンバー間において綿密な打ち合わせがもたれた．

４．イベント当日

2015年５月31日㈰，岩手県宮古市田老地区「グリーンピア三陸みやこ」内のふれあい交流館において「田老ふれあいライブ」を実施した．現地までの学生の移動は，貸切バスにて対応した．また現地にて第一筆者と合流した．参加学生の内訳を表１に記す．

表１　田老ふれあいライブに参加した学生の内訳

	吹奏楽サークル	からあげ同好会
医　学　部	4年　1名 3年　1名 2年　1名	2年　7名 1年　1名
歯　学　部	0	2年　1名 1年　2名
薬　学　部	3年　3名 2年　2名	0
合　計	8名	11名

現地に着いた学生は，３班に分かれ準備をおこなった．吹奏楽演奏のリハーサル，からあげの準備，そして田老地区仮設住宅全戸へのチラシ配布によるイベントの広報周知である．チラシ配布には，臨床心理士２名が同行し，声がけの仕方など指導をしながらおこなった．

13：00頃から住民の方が集まりはじめ，学生によるからあげの提供やドリンクの提供がおこなわれた．13：30からイベント開始，吹奏楽サークルによる「My favorite things」など計４曲が演奏され，来場者からのあたたかな拍手を受けた．14：00からはブドリ舎Bandの演奏となり，その間も学生は，ドリンク提供や来場者への声がけなどに従事した．

15：00でイベントは終了，100名超の来場者となった．写真はイベントの様子の抜粋である．

5．イベント終了後

今回の活動のふりかえりを第一筆者と学生にておこなった．ふりかえりミーティングは，吹奏楽サークルは2015年６月９日，からあげ同好会は同17日におこなった．そこでは活動の感想，反省，今

後の活動予定などが話し合われた．また，アンケート調査への協力を求めた．

また２団体代表と第一筆者にて，同年６月13日にチャリティ販売売り上げを提供くださったベーカリーに御礼にうかがった．

Ⅲ．イベント後のアンケート調査の分析

本研究では，田老ふれあいライブに参加した学生を対象にイベント終了後に実施したアンケート調査の内容を分析した．

１．調査目的

東日本大震災津波の被災地での臨床心理学的地域援助実践への参加が，医療系大学生にどのような体験となり，またどのような影響を及ぼしたかを検討する．

２．調査方法と対象

本イベントは東日本大震災津波から４年２ヶ月後に実施されたもので，それへと参加した学生のうち，後日の「ふりかえりの会」に参加した学生，および調査に協力できる意向を示した学生を対象とし，アンケート調査を実施した．イベント参加学生19名中13名（回答率68.4％）から回答を得た．

３．調査内容

氏名，性別，年齢，東日本大震災津波発災時の居所などの基本情報の記載と，以下の項目・尺度への回答を求めた．

・イベントの感想およびふりかえり（自由記述）

ふりかえり１：今回の「田老ふれあいライブ」に参加した感想を教えて下さい．

ふりかえり２：被災地（岩手県宮古市田老）の仮設住宅地域に実際に出かけてみて，感じたことや考えたことなど，教えて下さい．

ふりかえり３：「田老ふれあいライブ」に参加する前を思い出して下さい．被災地に自分が関わることについて，あなた自身はどのように考えていましたか？

ふりかえり４：「田老ふれあいライブ」を経たいま現在（2015年６月），被災地への自分の関わりについてのあなたの考えや，今後してみたいことなどあれば，教えて下さい．

・二次元レジリエンス尺度：BRS

レジリエンスとは，困難で脅威的な状態にさらされることで一時的に心理的不健康の状態に陥っても，それを乗り越え，精神的病理を示さず，よく適応している状態を指す概念である（小塩他，2002）．BRS尺度は平野（2010）により作成され，資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因の２下位尺度，計21問の質問項目（例：どんなことでも，たいていなんとかなりそうな気がする）から構成され，まったくあてはまらない～よくあてはまる の５件法で回答を求めた．

・日本語版外傷後成長尺度：PTGI－J（宅，2010）

外傷性成長（post traumatic growth）とは，トラウマティックストレスを体験した人の中に生じる，他者との関係性の変容，新たな可能性の模索，自己の強さの実感，スピリチュアルな変化，生命と人生に対する感謝等のポジティブな変容のことを意味する概念である（Tedeschi＆Calhoun，1996）．被災地にかかわり被災体験に接することは，支援者にとって傷つきやショックを感じる体験となることもある．本調査においては，被災地のイベントにかかわった結果生じた変化をはかるため，本尺度を

用いることとした．計21問の質問項目（例：人生において，何が重要かについての優先順位を変えた）に対し，まったく経験しなかった～かなり強く経験した の６件法での回答を求めた．

・Ｋ６日本語版（Kessler et al., 2002；古川ら，2003）

気分･不安障害のスクリーニングを目的に開発された尺度で，GHQ（General Health Questionnaire）よりも質問数が少なく簡便に実施でき，スクリーニング精度は鋭敏であるとされている．今回はスクリーニングのためではなく，メンタルヘルスの状態を把握する目的で，本尺度を用いた．「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」などの計６問の質問項目に対し，過去30日の間にどれくらいの頻度であったかを，まったくない～いつも の５件法で回答を求めた．

４．分析方法

BRS，PTGI－J，Ｋ６日本語版への回答について，対象者ごとにBRS総得点を算出，全体の平均値を基準に「レジリエンス高群」「レジリエンス低群」に分け，統計的分析をおこなった．分析にはIBM SPSS Statistics ver. 22を用いた．

被災地での臨床心理学的地域援助実践への参加による学生の変化を検討するため，量的分析においては，被災地での単回のイベントにおける被災者との交流を，被災体験への間接的接近ととらえ，その体験後に生じた変化を外傷性成長として理解することとした。同時に，災害にふれたことに伴うメンタルヘルスの状態について，Ｋ６尺度を用いて確認した。

ここでは体験後の外傷性成長というポジティブな変化と，体験後のメンタルヘルスの状態について，レジリエンスの高低による違いを検討した．具体的には，レジリエンスが高い学生においては外傷性成長が高くメンタルヘルスの不調感はない，一方レジリエンスが低い学生では外傷性成長が低くメンタルヘルスの不調感がみられるのではないか，との仮説に基づいて検討した．

質的分析では自由記述についてふりかえり１～４ごとに一覧表へと入力した．その後研究者２名による一次分析として，一覧表に基づき，ふりかえり項目ごとでの重要アイテムの抽出をおこない，二次分析として，アイテム同士の関連を検討し，重要カテゴリーとして名称をつけ，整理をおこなった．これらの分析作業においては，重複する内容は１アイテムにまとめたが，極端な抽象化はおこなわず，内容が理解できる範囲の抽象化にとどめた．さらに，レジリエンス高群・低群に分けて，重要アイテムの内容に差がないかを検討した．

５．倫理的配慮

対象者には，調査の趣旨について，調査への協力と同意の撤回が自由にできること，データ分析にあたっては個人が特定できないようにする等プライバシーの確保をはかること，データ保管は個人情報の保護を厳重におこなうこと，得られた結果は学術成果物として発表すること等について，書面で説明した上で，同意書により調査協力の同意を得た．

Ⅳ．結　果

1．回答者の特徴

回答者の性別は男性６名，女性７名であり，平均年齢は21歳（19歳～25歳），岩手医科大学に在学する学生である．東日本大震災津波発災時の居所は，被災三県にいた者は５名であった．また被災地における支援活動は，全員が初めての経験であった．

表２　対象者の基本属性

男　女　比	男性６名、女性７名	
平 均 年 齢	21歳（SD 1.84）	
発災時の居所	岩手宮城福島の被災三県	５名
	青森秋田山形の東北地方	２名
	関東地方	３名
	関西・九州地方	３名

2．量的分析

BRS総得点（得点範囲21点～105点）の平均値（74.7点，SD 13.2）をもとにレジリエンス高群・低群にわけたところ，レジリエンス高群は６名，レジリエンス低群は７名であった．両群間における各尺度得点の平均値の差をt検定により検討した結果，PTGI－J得点においてレジリエンス高群のほうが低群よりも得点が高かったが，有意な差ではなかった（t＝1.866，p＝0.89）．

なおＫ６得点においては，両群間に有意差は見られなかった．

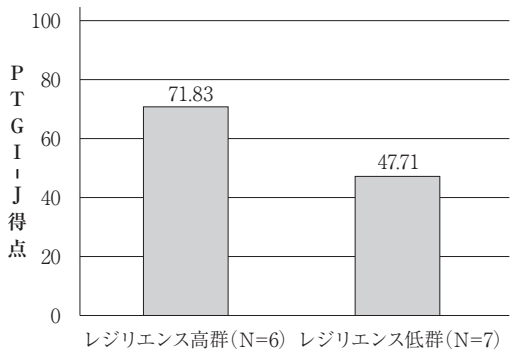

図１　レジリエンス高低群における
ＰＴＧＩ－Ｊ得点

3．質的分析

自由記述で語られた内容は，一次分析により96の重要アイテムが抽出された．そしてそれらを二次分析にて，重要アイテムを58に集約し，12の重要カテゴリーに分類した．そのカテゴリーは＜活動前の気持ち・考え＞，＜活動後の気持ち・考え＞の２領域に分類した．＜活動前の気持ち・考え＞領域はふりかえり３への記載から，＜活動後の気持ち・考え＞領域はふりかえり１，２，４の内容をまとめて検討し，カテゴリーに分類した．但しふりかえり１，２，４への記載中，活動前の気持ちが記載されていたものに関しては，一部＜活動前の気持ち・考え＞領域内に含め分類した．

結果について表３に示す．量的分析と同様レジリエンス高群低群における検討をおこなったが，表中ではレジリエンス高群による回答は**ゴシック体**，レジリエンス低群による回答は明朝体，レジリエンス高低両群から得られた内容は**アンダーライン強調表記**にて記載した．

表３　活動前後の気持ち・考え

領域 （N＝２）	重要アイテム （N=58）	重要カテゴリー （N=12）
活動前の 気持ち・考え	・**人を笑顔にできて，少しでも楽しい時を過ごせることができればいいなと考えた** ・参加したいと考えていたが機会がなかった ・少しでも被災された方々の役に立てればという重い考え ・演奏やおいしい食べ物で元気を出してほしい	貢献したい思い
	・**<u>はじめは何ができるわけでもないし，役に立つのか心配だった</u>** ・**<u>現地の方とうまく接することができるか不安だった</u>** ・実際に仮設住宅に行くのははじめてだったので緊張した ・最初はお客さんが来るか心配だった ・津波が来たり，地震が起きないか，心配になった	活動への不安
	・**自分が介入しても何も変わることはない．ただのボランティアとして現れるだけだ** ・被災者支援は大切だと思っていたけど，積極的に関わろうとは考えていなかった ・まったく想像していなかった．漠然と大変だなぁ程度にしか考えておらず，自分が被災地に関わることはないだろう	第三者的意識
	・出身地でもあるので，あまり被災地と気負わず参加した ・自身が地元で被災した	当事者意識
	・**知りたくないことは知らなければいけないことなのではないか** ・**自分の目で現状をみておきたいと考えていた**	直面する覚悟
活動後の 気持ち・考え	・**<u>気持ちよく，楽しく演奏でき，また来てくれたお客さんの心に響いてくれて嬉しかった</u>** ・**<u>普段あまり関わることのない人と交流できて，とても有意義な時間を過ごせた</u>**	活動で得られた 満足感

活動後の 気持ち・考え	・**からあげを食べた方に喜んでもらったのが何よりの収穫だった** ・心理学で勉強した「地域援助」を実感することができてよかった ・臨床心理士からのアドバイスを受けながら，住民とコミュニケーションを取ることができて良かった ・自分たちで作ったからあげはとても美味しかった ・たくさんの人に来ていただいて，楽しんでいる様子を見ることができて良かった ・仲間の演奏や他団体の演奏を楽しめた	活動で得られた 満足感
	・**全員が，心の曇りなく暮らしているとはまだ断言できない状況と思う** ・**被災者の方々は明るくて，行く前に考えていたイメージと異なった** ・イベントを一つの楽しみに，一日を大切に楽しく生きていこうという思いが，すごく伝わってきた ・仮設住宅がまだ多く立ち並んでいて，復興しているとは言いがたい状況だった ・何もなくて驚いた ・集合仮設住宅には少なからずショックを受けた ・はじめて被災地に行き，沿岸部の様子を実際にみた ・思ったよりも昔のイメージのままで驚いた ・チラシ配りで仮設住宅の方々と言葉を交わしたが，皆優しい方々だった ・お互いに知らなくても声を掛け合っていたので，周りの人とのつながりを大事にしていると思った	被災地に抱いた イメージと現実
	・**また次回，団体として被災地に行き，演奏会などで貢献できたら良いと思う** ・どんなことでもやってみたい。実際人に会ってお話をしたい。文通なども可能ならやってみたい。いろんな年代の人とお話してみたい ・機会があれば積極的にボランティアをしていきたいと思った ・自分は岩手県で医療職として働く予定なので，将来的に，自分も復興に関われたら良いなと思う ・次は自分も演奏に参加したいと思った ・他団体の演奏がうまいだけでなく，観客も参加できるような工夫があったので，参考にしたい ・自分たちのサークルにできる取り組みをしていきたい ・今後はからあげ提供の量も工夫しみんなが食べられるようにしたい	活動への意気込み
	・今できるすべてのことに全力でやろうと思えた ・災害について深く考える機会になった ・職に就いたとしても被災地で活躍できることを知った	活動から得られた気づき

活動後の気持ち・考え	・余計なことを考えずに，ただ一人の人として接すればいいんだなと思った ・小さなことでもその地に行ってみるということが大事だと思った ・なにか自分たちができることがまだまだあるのかもしれないと思った	活動から得られた気づき
	・あくまで仮設であるため，早く住民の方が自分の家を持てると良いと思う ・被災地の復旧は完全ではなく，これから少しずつでもいいので，完全な復旧を目指していければ ・実際に被災地の状況を知り，まだまだ復興支援は必要だと感じた	復興への願い
	・まだ復興に向けて頑張っている方々がいるということを忘れてはいけないと思う ・被災地の現実をしっかりとみないといけないと思った	震災と向き合うこと
	・被災者の方の「今生活できているのはみんなのこういった支援のおかげだ」と言っていたことがとても心に残っている ・緑がなく，土がむき出しで，先には海が見えていて，少し複雑な気分になった ・遊んでいた男の子が「親はいないけど，じいちゃんとばあちゃんがいるからさびしくない」と言っていたのが，帰ってからも頭から離れなかった ・実際に多くの死者・行方不明者が出た地域ということで，なんともいえない気持ちになった ・うまく言葉にできません	言葉にならない思い

以降においては，得られた重要アイテムを「 」，重要カテゴリーを『 』にて示す．

1）＜活動前の気持ち・考え＞の領域

活動前の気持ち・考えとして，「少しでも楽しい時を過ごせることができれば」「被災された方々の役に立てれば」「食べ物で元気を出してほしい」と今回の活動を通して被災地への『貢献したい思い』が語られた．その一方で，回答者の約半数が，「役に立つか心配だった」「被災地ははじめてだったので緊張した」「うまく接することができるか不安だった」と『活動への不安』も同時に抱いていた．

また，活動する前の心構えとして，「積極的に関わろうと考えていなかった」「漠然と大変だなぁ程度にしか考えておらず」と発災時に被災県外にいた学生の中には，自分には関係がないとの『第三者的意識』も有していた．その半面，被災三県が居所であった学生は，「被災地と気負わず」と今回の活動を特別なものと捉えるのではなく，実際に被災を経験したからこその『当事者意識』を抱いて臨む姿勢の違いも明らかになった．また被災県外の学生は，被災を経験していない・現状を知らないからこそ，今回の活動を通して，被災の現状に『直面する覚悟』を抱いて出向く意識も語られた．

2）＜活動後の気持ち・考え＞の領域

回答者の大半から，今回の活動を通して，イベント来訪者の反応や自分たちの演奏およびからあげ提供に対して『活動から得られた満足感』と「また次回，団体として被災地に行き，演奏会などで貢献できたら良い」と，この先の『活動への意気込み』が語られた．学生にとって今回の支援活動の体験は有意義な体験だったことがうかがえた．また，今後の支援活動への前向きな意気込みだけではなく，「今できるすべてのことに全力でやろう」「ただ一人の人として接すればいい」と自分自身の今後のふるまい方や活動への向き合い方を見直す『活動から得られた気づき』の機会ともなっていた．

今回参加した学生は，初めて被災地を訪れ，被災した方々と関わり，そして被災した風景や実際に暮らしている仮設住宅を見た者が多かった．活動前に被災地に抱いていたイメージと，実際現地を訪れたことでの『被災地に抱いたイメージと現実』のギャップを感じる者もいれば，被災前との変わらなさを感じた者もあり，各々において多様な発見があったことがうかがえる．さらに今回の活動で，学生には『言葉にならない思い』がわき上がり，この体験は活動を終えてからも深く心に残るものとして受け止められたようである．発災時被災三県が居所であった学生の中には，「少しずつでもいいので，完全な復旧を目指していければ」と『復興への願い』を抱いている者もいた．その一方で，被災がなかった学生においても「被災地の現実をしっかりみないといけない」と，日常において『震災と向き合うこと』について，思いを強める契機となったことが読み取れた．

3）レジリエンス高低群による内容分析

量的分析でのレジリエンス高低群の分類に従い，自由記述内容における質的な差について検討した．結果，レジリエンスの高低による質的な差は確認できなかった．

V．考　察

1．臨床心理学的地域援助実践への参加は，学生にどのように体験されたか

今回学生は，被災地での臨床心理学的地域援助実践の一部としての「田老ふれあいライブ」に参加したが，参加前は『貢献したい思い』はあれど『活動への不安』も感じる中，なんらかの『直面する覚悟』をもって現地に向かった．現地での住民との交流をおこなう中で『言葉にならない思い』を抱きながら『被災地に抱いたイメージと現実』のすり合わせや修正・補強をおこない，最終的には『復興への願い』への思いを強くする体験となったことがうかがえた．

今回の活動では，本学医学部・歯学部・薬学部の３学部学生による参加が得られた．医療系大学生の災害支援活動については，柏葉・奥寺（2014）は災害看護教育としての災害ボランティア経験について，参加した看護学生へのアンケートを実施，体験終了後に「不安と緊張」「戸惑い」「スキルの活用」「カタルシス」「現場からの学び」「被災者に対する学生の思い」「心のケア」「ボランティアの意義」「生きる力」「自己効力感」の10カテゴリーを得ている．また富澤他（2014）も看護学生を対象に災害ボランティア活動の感想を調査し，その分析をおこなっているが，「被災の実情の理解」「ボランティア活動を通した出会い」「触れ合いで得られた喜び」「ボランティアの意義を実感」「看護の視点からの気づき」「看護学生ならではの活動で得た充実感」「看護学生としての成長を実感」の７カテゴリーを抽出している．他にも看護系大学生による支援ボランティアの意義についての研究は数件確認できたが，医学部・歯学部・薬学部学生による支援活動とその体験が学生にどのように感じられたかに関する研究は，確認できなかった．

今回は臨床心理学の立場からの支援活動への参加であったが，学生の所属する学部，すなわち学生が目指す将来像を反映した実践活動に関与できた場合，学生の体験の質も異なってくるのではないかと推察される．しかしながら，臨床心理学という，医療モデルに準拠しない立場をとるアプローチにふれることは，「イベントを一つの楽しみに，一日を大切に楽しく生きていこうという思いが，すごく伝わってきた」のアイテムに示されるような，被災者の生活面・心理面・社会面からのwell－beingを理解するという，新たな視点を得る体験となったと考えられた．災害現場における自らの専門性への過度な拘泥は，野田（1995）による「専門離人症」（自身の学問分野の既存テーマを繰り返し持ち出し，震災で起こっている現実にほとんどかかわることのできない一群の人々の傾向）の指摘等への反省から，東日本大震災においてはあらゆる職種に共通するマニュアルとしてのPFA（psychological first aid）が推奨された．学生による「余計なことを考えずに，ただ一人の人として接すればいいんだなと思った」との気づきからは，目の前の人を尊重し理解したい，そして自分にできることへの力を尽くしたいという，全人的医療体現への萌芽が感じられ，学生個々人にとって重要な機会として機能したことがうかがえた．

2．アクティブ・ラーニングとしての被災地支援体験の意義

アクティブ・ラーニングとは，教員による一方向的な講義形式での教育ではなく，学生が能動的に学修に参加することを取り入れた教授法・学習法を指す．これと近接する学びの形態にワークショップがある．ワークショップとは，講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく，参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学び合ったり作り出したりする学びと創造のスタイルである（中野，2001）．また中野によれば，ワークショップには３つのキーワードがあり，1つ目の「参加」とは自ら参加し関わっていく主体性，２つ目の「体験」とは頭で考えるのみならず身体と心をまるごと総動員して感じること，3つ目の「グループ」とはお互いの相互作用や多様性の中で分かち合い刺激し合い学んで行く双方向性を挙げている．ここでの「参加」にかかわる“主体性”について，諏訪他（2005）は，学生の災害時のボランティア活動における状況的関心（論理的な一貫性に基づかずに語られるところの関心）に着目し，支援活動への構造的関心が強くなくとも，活動への関与を通じた学生の学びの成立が得られることを指摘している．今回参加した学生には，支援活動や復興支援への興味関心よりも，サークル活動の達成としての動機により参加した者も少なからず含まれていた．しかしながら，「体験」を「グループ」でおこなうことを通し，他の学生の姿勢・ふるまいからの学びや，住民の方からの反応からの学びを得たことにより，自身における活動の意味を再定義し，『活動への意気込み』を感じるに至ったと考えられた．

加えて今回は，臨床心理学的地域援助実践を継続している臨床心理士とともに活動をおこなった．活動前は「臨床心理士が仮設住宅でカウンセリングや心理検査をするのだろうか」「住民の方の心理的な特徴をとらえることなんて自分にはできない」との疑問や戸惑いをもらした学生もいたが，協働することを通し，見守り方や寄り添い方の一形態にふれることができた．また業務外でも自身の職能を活かした関わりが可能であるという“専門職としての社会貢献”のイメージが明確になったことがうかがえた．実際に臨床的活動をしている専門職との接点からの気づきの獲得は，今後の多職種連携教育（IPE）としての展開も示唆され，実践を通じた学修への考察が，引き続き求められる．

また，支援活動体験を学びとして活かせる学生とそうではない学生が存在するのではないか，存在するとすればそれはどのような要因が影響して生じる差異なのか，という疑問について，本研究においては，「心の弾力性」としてのレジリエンスを取り上げ，その強さに応じた成長の有り様の違いがあるのではないかとの仮説に基づき，検討をおこなった．今回の調査においては，量的検討の一変数と

して，レジリエンスを個人内特性と位置づけ，レジリエンスの強さと諸要因の関連の検討をおこない，また質的検討においても，レジリエンスの強さによる記述の違いを検討した．結果，量的分析においては外傷性成長における違いが示唆されたが有意差は見出せず，質的分析においてはレジリエンスによる差異は確認できなかった．今回の分析は対象人数も少なく，資質的／獲得的レジリエンス要因の観点からの検討はおこなっていない．今後，体験を活かせるような学びの設計のため，これらの詳細な検討が課題となろう．加えて，発災時の居所等の影響により，気持ちや考えの違いが生じた可能性についても検討が必要である．今回の自由記述回答においては，＜活動前＞では『第三者的意識』『直面する覚悟』『当事者意識』のカテゴリーにおいて，＜活動後＞では『震災と向き合うこと』と『復興への願い』のカテゴリーにおいて，発災時の居所による違いがうかがえるような回答が確認された．この点についても引き続きの検討が必要である．

岩手医科大学は「医療人たる前に，誠の人間たれ」との“全人的地域総合医療”を理想に掲げている．ケアの対象となる相手への全人的まなざしを育む機会は，今後一層必要となる．そのためには，支援活動を通した学修のためのプログラムのみならず，茶屋道・筒井（2012）が指摘する「ふりかえり，語りおろし，気づき，癒やされ，成長する」ステップを活動後に学生と共有できるような仕組みが求められる．

謝　辞

本学学生がイベントに関与するにあたり，宮古市社会福祉協議会田老福祉センター，グリーンピア三陸みやこ，田老ふれあいライブ実行委員会（パン屋√s，ブドリ舎Band，あゆみカウンセリングルーム），岩手県臨床心理士会宮古支援チームには多大なるご理解ご協力をいただきました．ここに記して感謝申し上げます．また学生を受け入れて下さったグリーンピア三陸みやこ仮設住宅住民の皆様に心より御礼申し上げます．

引用文献

茶屋道拓哉・筒井　睦　2012　東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義．九州看護福祉大学紀要，12(1)，25－37.

藤澤美穂　2013　岩手県沿岸部の仮設住宅コミュニティ支援と，支援チームというグループ．集団精神療法，29(1)，54－60.

藤澤(川口)美穂・山口　浩　2012　東日本大震災のアウトリーチ支援におけるリラクセーションの実践．現代行動科学会誌，28，18－29.

古川壽亮・大野　裕・宇田英典・中根允文　2003　一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究．平成14年度厚生労働科学研究費補助金（厚生労働科学特別研究事業）心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究　研究協力報告書.

平野真理　2010　レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み－二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成．パーソナリティ研究，19(2)，94－106.

岩手県庁ホームページ（2015年９月28日閲覧）：
http://www.pref.iwate.jp/dbps_data/_material_/_files/000/000/009/718/20150831sinnchokuj youkyou.pdf
http://www.pref.iwate.jp/dbps_data/_material_/_files/000/000/023/870/minashi 2708.pdf

岩手県臨床心理士会　2015　東日本大震災に関する支援活動報告書（平成26年４月～平成27年３月）.

柏葉英美・奥寺三枝子　2014　看護基礎教育における災害ボランティアの教育効果．岩手県立社会福

祉学部紀要，16，1－9.

Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., Walters, E. E., & Zaslavsky, A. M. 2002 Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. Psychological Medicine, 32, 959－976.

中野民夫　2001 『ワークショップ』 岩波新書，p. 11.

野田正彰　1995 『災害救援』 岩波新書，　p. 171.

小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治　2002　ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性―精神的回復力尺度の作成―．カウンセリング研究，35，57－65.

諏訪晃一・渥美公秀・関嘉寛　2005　学生による災害時のボランティア活動と状況的関心－新潟県中越地震におけるfrom　HUSの活動から－．ボランティア学研究，6，71－95.

Tedeschi. R.G. & Calhoun, L.G. 1996　The Posttraumatic Growth Inventory : Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress, 9，455－471.

富澤弥生・小野木弘志・菅原尚美・杉山敏子・菅原千恵子・河村真人・鈴木千明・一ノ瀬まきの・工藤洋子・二瓶洋子・中村令子・門屋久美子　2014　東日本大震災ボランティア活動による看護学生の学びに関する検討．東北福祉大学研究紀要，38，199－220.

山本和郎　2001　臨床心理学的地域援助とは何か－その定義・理念・独自性・方法について．山本和郎（編）『臨床心理学的地域援助の展開－コミュニティ心理学の実践と今日的課題－』培風館，pp. 244－256.